

---

# 零崎冒識の人間具合

光軍(受験也)

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

零崎冒識の人間具合

### 【Nコード】

N2433W

### 【作者名】

光軍（受験也）

### 【あらすじ】

《零崎一賊》 それは“殺し名”序列第三位に列し、理由なく人を殺す殺人鬼の集団。 殺人鬼・零崎冒識ぜろみつき・おかしきはそんな零崎一賊の中でも成り損ないと呼ばれた零崎。 まだまだ未熟者ですのでキャラが崩壊していたり話の都合上死んだ筈のキャラが生きていたりします。 又若干話の流れが違ってたりしますかもです。

## エピソード（前書き）

西尾維新さんの作品での二次作は初投稿です。

最近、設定とかがないがしろになれてるモノが多い気がしますので、そこら辺の事には気を付けようと思います。

ではでは、どじろ

## エピソード

某県、某市の某所にあるとある一軒。

それは普通で普通の普通の普通を絵に描いたようなごくごく普通な家。その普通な家の、これまた普通の一室。その部屋は置いてある家具の大きさや部屋自体の広さからどうやら子供部屋のようなうだ。

そこには家具以外にも何か影のようなモノが二つあった。いやその影は人の形をしている。まあ人間である。一人はベッドに座り一人は向かい合うようにその前に立っていた。見た目からするとその二人とも男のようである。いやベッドに座っている一人は、そのまだ小さな体躯からして男と言うより、どちらかと言えば少年の姿であった。

そしてその二人が立っている床、そして二人の周りを囲む“壁”。それら全てが真っ赤に染まっていた。元々この部屋にあった壁紙や床が見えなくなるほど真っ赤になっ赤になっていた。

それは血だった。

その部屋は床全体に血の海を作り、部屋中が血だらけだった。

その部屋は

普通じゃなかった。

よく目を凝らしてその部屋を見渡してみると、二人以外にも人がいた。否、それはもはや人とは呼べないだろう。それはこの部屋と同じく真っ赤に血だらけとなった。ただの肉片だ。人間だったモノが、ただの肉の塊と化したモノだった。

そんな人間だった肉片には気にもせず立っている男は特に問題ない。何も変わらず、眉一つ動かさず冷静（実際冷静かどうかは判断しにくい）だった。

いや、この状況では逆に問題だ。自分の傍に人間だった肉の塊があるのに冷静でいられる人間を、人は問題ないと言えるだろうか。この場で、この状況で冷静にしている人間を問題ないとは言えないのではないだろうか。

しかし座っている少年の方はもっと“問題”だった。その少年の着ている服。まだ若々しい潤いのある肌。小さな手。幼い顔。それら全てが真っ赤に真っ赤に真っ赤に真っ赤に真っ赤に真っ赤に真っ赤になっっていた。この部屋の床や壁同様、傍の肉片同様、その少年は 血だらけだ。

この状況から察するにもしやこの少年は いや、これはもう『もしや』、ではないだろう。これは既に決定的だ そう確信できる域まできている。

ごくごく普通の家の一室の、真っ赤に血で染まった子供部屋。その部屋にいる全身血だらけの少年と男、人間が二人。二人の傍らに血だらけの肉の塊、人間だったモノが二つ。

いくら子供であろうと、誰が弁解しようと この状況を、この場を、この空間を作ったのは目にみえている。

いや まだ確信にはいけない、確実とは言えないモノがこ

の状況には残っている。いくら血だらけの部屋で血だらけの少年がいても、いくらその場に人間だった肉の塊があってもだ。現時点で容疑者の疑いをかけられている少年は、まだ少年である。死んだ人間を　死体を目の前にして普通でいられる筈がない。ましてや男のように冷静でいられる筈がない。そうもしかしたらその男がやったのかもしれない。少年はこの男に目の前で人間の死を晒されたのかもしれない。そして死の恐怖に怯えながらただ呆然としているだけかもしれない。

だがしかし、そんな儂く少年なくとも希望は少年のその顔に浮かべている表情一つで霧中へと消え去ったのだ

その少年は　ニヤニヤと笑って、笑顔でいた。

おそらく先ほどまで少年にかけられた仮説　唯一無二だったであろう希望はなくなった。

「　と、言うことだっちゃ。わかったっちゃか」と男の方が少年に向かって言う

「　つまり……………どゆこと?」

それに答えるように少年はその外見の年頃に似合わない、邪悪で純朴な表情をしながら首を傾げた

「だあー！ 何度説明すればいいんだっっちゃ！ いい加減にするっっちゃよ」

「んなこと言われても……よくわかんないんだよ 軋識さん」

そしてその男 軋識は溜息を吐いてから血だらけの少年を見据えた。

「全く。別の零崎の感じがしたと思ったら とんだ結末だっっちゃよ。オメー本当に零崎なんだっっちゃか？」

「さあ？わかんないや。てかさ、そもそも俺って殺人鬼なの？」

「わかんないって………自覚も無しっっちゃか。こりゃ面倒っっちゃね」

「面倒って何。家賊に引き込み難いとかそういうのだから？」

「んだよ ちゃんと一応は聞いているじゃないっっちゃか」

「まあね」

少年は再びニヤニヤと笑いだす。 それを変なものを見るかのような目でみる軋識。

しばらく間を開けてから、軋識が口を開けた

「んじゃあちやっっちゃと済ませたいから率直に言っっちゃよ  
オメー、俺たちの家賊にならないっっちゃか」

「いいよ」軋識の誘いにこちら間を開けずに率直に返した少年だった

「……………」

「…………ん？　どつたの？」

「…………いやな。なんかこう…………もうちよつと自分の中で葛藤があつても良いんじゃないっっちゃか？　殺人鬼っっちゃよ？」

「無いものは無いんだから仕方ないよ。それにおとーちゃんもおかーちゃんも死んじやつたみたいだし」

再びニヤニヤと笑う少年。

そして少年の台詞を聞いて軋識はチラリと自分の傍にある血塗れの二つの肉の塊を見た

「はあ…………まあ良いっっちゃ」

「……………」

と軋識が溜息を吐いたその後少年は言った。

「あん？」

「ん？　俺の名前言っただけなんだけど？　…………さっき聞いた話だと言つといた方がいいかと思つて」

「…………ああ、確かに説明したっっちゃね。　か。なら

名前はそうっっちゃね…………お前のその名前にその変におかしな奴だ

っっちゃしから零崎　　冒識。

零崎冒識、つてのはどうだっっちゃ？」

「冒識………良いね。スゴクカッコいい気がする」

そう言っつてニヤニヤから笑顔に変わる少年　　もとい冒識

「オメーなんでそんなに偉そうなんだっちゃ」

「さあ？なんでだろ」

「まあ、良いっっちゃ。………とりあえずこいつはレン辺りにでも押し付けてみるっっちゃか………」

「やだよ、俺軋兄に付いて行きたい」距離が近いせいか、軋識の咳きか聞こえたらしく冒識は軋識の案を拒否した。

「誰がオメーみたいな変な奴好き好んで連れて行きたいと思っつっちゃ………」

「軋兄さ！」

「うるさいっっちゃ！」

その後軋識はひとまず仕方なく不本意ながらもその場に居続けるワケにもいかず冒識を連れて、その一室以外は普通で普通だった家を後にした。

これにて彼の人としての物語は終わり、鬼としての物語が始まる。

## エピソード（後書き）

始めですので、こんな感じで………何か微妙ですかね？

自称：否定人間ですが頑張りながらもゆっくりと書いていこうと思います。

## 夜道の、負い駆けっこ（前書き）

最近ようやくと戯言シリーズを読み終えました。

今年の3月の頭から人間シリーズから買いながら読み始め、それを読み終えてから戯言シリーズを買いながら読み、刀語を平行させて借りて読み　そして刀語が終わり、戯言シリーズもようやくと読み終わりました。

お金があまりないから時間掛かりましたよ…

では、どうぞ

## 夜道の、負い駆けっこ

「　　っ」

現在の季節は冬、時刻は虎の刻あたり。

日はとうに沈み真夜中となり、寒い冬空の凍てつく空気と身体を通り抜ける風が自然と頬を刺激する。闇と月が支配する真っ暗闇の夜道　　そこを走る影があった。

「ハアハア…ハア…」

その影は走る　　というよりも寧ろ何かから逃げているようであった　　息絶え絶えになりながら逃げてるように見える。

実際その影は　　いや、逃げているという時点でそれは人間だ　　その人物は逃げているのだ。

それもそのはず、逃げている人物の数メートル後方にはその人物を追い掛けている者がいたのだ。

その手に一振りの刀を持って

「　　チツ、逃げ回んじゃねーよ。殺せないじゃんかよあ！」  
前方で逃げている人物に向かってそんな事を叫びながらいたのだ。  
その者は一見イライラしているようにもとれるが、その顔は  
ニタニタと笑っていた。

「ゼエ…ゼエ…」

後ろから聞こえる声には反応せず、ただ逃げ回っていた。戦略的撤退………などと言う言葉は似付かわしく無い程、惨めに逃走遁走脱走奔走　　駆けずり回っていた。

因みに逃げ回っている人物はジャージを上下に着た動き易そうな格好をした男性………否、青年。  
それを追い掛けているのは　　全身を真っ黒いスーツで身を包んだ、こちららも男性。若そうだが青年という程でも無いが、かなり若そうな風貌である。

「　　まあった殺し甲斐の無さそうな見つけちまったなあ………他の奴らに何と言われるのやら　　まっ、そんな事言っても別に関係ないんだけどな」

スーツ姿の男はそう呟くと、一気にペースを上げて走りドンドン青年との距離を縮めて行く。

「ハアハア……ハア………んなっ」  
スーツ姿の男はジャージの青年とのかなり　　とまでは言わなくともそれなりにあった筈の距離を、それを何でも無いかのようにいと簡単に詰めていったのだ。

そして、片手に持っている刀を振り上げて

「ひゃっは」

笑い。ジャージの青年へ　　青年の脳天目がけて、振り下ろす。

「っ  
！」

間一髪　　とは言い切れないが、刀は青年の脳天を直撃する事はなかった。

しかし肩口を軽く斬られたのだが青年は身体を横転させる事で振り下ろされた刀を避けたのだった。

まず刀と言うモノは切ることが大前提だ。縦横斜めと切り方は様々だが　中でも刀を振り上げてからの振り下ろしは高威力だがかなりのタイムラグが生じてしまう。それは振り下ろす為には刀を一度上へと振り上げなければならぬからだ。刀はそれ一本でも相当な重量がある、だから振り下ろしというのには高い威力を有する。しかしその行為には問題がある。刀というその鉄の塊たる重量を振り上げるのにはかなり力が必要とする、更にただ振り下ろすのにも力があるのだ。だから振り上げて、一度上げたままで刀を制止させてから、振り下ろすという動作が必要なのだ。一度振り上げる必要があるならば、最初から下から振り上げる方がよっぽど早いし力も先のよりさほど必要としない。なので刀を振り上げてから振り下ろす、という一連の流れ　動作を行うまでに刀の存在を後ろからでも気付く事が可能であるのだ。

そういうワケで青年はスーツ姿の男の攻撃を間一髪といった形で避ける事が出来たのだった。

閑話休題。

「はははははっ  
」

「ハア……ぐっ　　ちっ……つくしゅっ……」

しかし一度くらい避けたからといって　だからといってそこ

から形勢や立場、何かが変わるワケでもなく寧ろ避けた所為で走っていた時の勢いは殺され更にスーツ姿の男は振り下ろした後、直ぐ様返す刀でジャージの青年へと追撃猛撃を繰り返したのだった。

そして青年は走りながらその身を捻りつつ刀の直撃を避けてはいるが、反撃する術もなくジャージの至るところを切られ皮を裂かれ頬を斬られるのみだった。

冬空の下、凍てつくような空気と冷たい風が切り口に痛むがそんな事はお構い無しにただただ逃げ惑っていた。

しかし、この逃走劇もそろそろ終盤を迎える事となった。

「ぜえ…ぜえ…ハア……………っ!!」

青年は男が刀を大振りするのに気付き、その隙を突いて突き当たりの角を曲がり一気に男を突き放そうとしたのだが……

「……………っ。畜生……」

その角を曲がった先は 左右の壁に挟まれ真ん前の壁に進路を閉ざされた 周り三方を囲まれた行き止まりだったのだ!

進める道は 進路は来た道のみ! 青年は直ぐ様身体を翻し来た道に戻ろうとするが

「 はっい。追い詰めた」

そこには片手に刀を持ちスーツを着た、凶悪そうな笑みを浮かべ真つ赤な下を出した男がいた。

「　　っ！」

まさに絶体絶命！　逃げ道も無い、進退これ谷まる　進むも退くもできはしない！

周り三方に囲まれたまさに八方塞がりならぬ三方塞がり！

いや男が最後の一方を塞いでいるので四方塞がりだろうか。

とにもかくにも、危急存亡の秋！　前方の殺人魔、後方の壁！

千里の野に殺人野郎を放つ！　通り魔に通行人！　一触即発

危機一髪、薄氷を履むが如し！

「……………なあ、一つ訊いても良いか……」

と、こんな場面で青年は恐らく男に向かって言う。

諦めか、それとも他の何かか　　虚ろな目をしてそう言ったのだ。

「あん？　どーせ今から殺されるんだよ　　まあ別に良いか。

俺の心は広いからな……………何だ」

恐らくこちらは気紛れだろう……………どうせ何も出来やしない、後は軽く殺せば良い話なのだから……………といったところだろう。まあ実際そうである。

「ふう……………、……………アンタ、何で人殺しをするんだ。何か理由でもあるのかよ……」

青年は乱れた息を整えそう言った。きつと自分には何か殺される理由があるのだろう、そう思ったのだ。いや、そう思わなくてはやりきれないのだろう。だからそう男に訊ねたのだ。

しかし、男の答えはそんな考えをまるつきり無視する形で裏切った。



後日、例の路地裏で誰にも知られず何者にも気付かれずひっそりと原形がないほどになり、それこそ肉片と血液を三方の壁と一方の道に撒き散らしてぐちゃぐちゃになっているという状況だった。

そして其処にはその他には誰も何もなく　　その場と同じように血で真っ赤に染められた見るに無惨なスーツが一着、あるだけだった。

夜道の、負い駆けっこ（後書き）

何か今回もアレでしたね…

しかし次回はその人がご登場！

するかも……多分、はい…

では、何かありましたら感想板の方へよろしくお願いします。

## 不遇愛（前書き）

えっと………あ、どうも、筆者っぽい立ち位置の光軍です。

色々あったり、もう一つの小説の方が色々ネタとか出てきたので先にそっちばっか更新していました。すみません。

なので、期間も空きに空いたので二話くらい連続な感じで更新しようかと思えます。

というかこの話に関しては、この小説を投稿する前から書けていたとかいう…。

今回、あの人が出ます。期待はしないでね！

では。

## 不遇愛

「で、どーしたのさ？　いきなり俺なんかを呼び出したりして……  
……双兄にしては珍しいじゃん、何か用でもあるの？」

「おいおい冒識くん、その件については今しがた一通り全部話した筈だろ？　それに会うために用が必要だなんて………そんな事は無いよ。ただ兄が愛する弟の顔を久しぶりに見たかっただけなんだよ。そういう理由ではダメかな？」

「ダメ、キモい、寄るな変態兄」

「もっと言いなさい、そんな言葉が私の糧となるからねっ！」

「ガチで気持ち悪っ！？」

と、まあこんな感じで話している。

本気で引いているのはジャージ姿の青年

名を零崎<sup>レイサキ</sup>冒識。そし

てその冒識に変態と呼ばれつつも何処か嬉しそうに微笑む三つ揃えの背広に銀縁眼鏡、更に不自然な程に長い手足にそれに加え針細工のような全体的に細い出で立ち　まるで夕焼け空の下で地面に移っている影を彷彿とさせる男であった。彼の名は零崎双識

零崎一賊という集団の長兄である。

「で、結局何の用だったんだYO」

「相変わらずキャラが定まって無いね。流石はアスもある意味で手を焼いたという零崎　　《荒唐無稽》　　《獄楽領土》<sup>ワイルドケース</sup>の零崎冒識君だ」

「キャラは定まって無いんじゃないか。無くて定まらないだけです。それとその呼び方止めて貰えません？　その呼び方苦手なんすよ」

「ウフフフ、良いじゃないか。どうせ一賊内で殆どの零崎から呼ばれない二つ名だ　　しかし呼ばない人がいないというのも可哀相な話だろう？」

「いや、だからその呼び方は苦手だから呼ばれない方が清々するし寧ろ嬉しいんだけど…」

因みに、今現在この二人は某パンに牛肉をミンチにして焼いたハンバーグや野菜や色々挟んだモノであるハンバーガーやフライドしたポテトやチキンみたいなのもやドリンクを提供するファーストフード店で軽い軽食を取りながら会話していたというのだ。

冒識はその体躯通りの量を　　ハンバーガーが一つポテトにドリンクとフライドしたチキン等をトレイに乗せて食べているが。

双識、彼はハンバーガーを三つ程を筆頭として、その細長い手足針金細工の体軀からは想像出来ない程の量を信じられないくらい余裕で食べていた。一体何処にそれほどまでの量が納まるというのだろうか。

それはなかなか興味をそえられるが　　今は関係の無い話である。

「で、何だっけ　　ひーくんが高校に進学出来なくなっただんだけだっけ？」

「ウフフ、流石。ちゃんと聞いてるじゃないか」

そんな冒識を見て微笑する双識なのだが、当の冒識はそんな双識が苦手であったのだ。

自分を今の形にしてくれた彼の人とは色々としてくれるしからかいがいがあったのだが　　零崎双識、この人には何処か全てを見透かされているような気がする　　なので冒識は双識の事が苦手なのだ。

「　　まあ確かにそうだね。人識君には悪いけど…」

「そもそも殺人鬼がフツの高校生やるなっつー事でしょ」

「まあね。中学すらもアレだったんだけどね」

「ゆーとーせーな生徒、って俺はアス兄から聞きましたけどね。」  
そしてハンバーガーの最後の一口を食べ終え、口元を拭いてから双識に向かって疑問をぶつけた。

「しかし、双兄でも　　マインドレンデルの零崎双識さんでも庇い切れなかっただなんて……………ひーくんの奴、全体何をやってましたんですかい？」

「それは……………まあ良いじゃないか」

冒識が彼の疑問をぶつけてみると先ほどまでの雰囲気は無くなり双

識は少し　　ほんの少々暗くなり口籠もってしまった。

しかし兄たる双識のそんな変化も何事も気にしない冒識は

「まあ、別にひーくんですしね。何やっちゃまったかなんて考えるのが無駄ですよね　　否、言うなればどちらかと言えば何でそんな事をしたのか　　の方ですね」  
と、至極軽い口調で言ったのだった。

「だね　　いやいや流石は冒識君だ」

「？」

「いやいや、何でもないよ冒識君。それより　　」

しかし双識も負けていない、そんな冒識を見て彼も直ぐ様調子を戻したのであったのだ。冒識の言葉を誤魔化すようにしながら、双識は言葉を続ける

「それよりも冒識君　　君に用事というのはだね」

「ああ、やっぱりそれはそれであったんだ……………何ですか？」

特に用事もクソもないので（俗に言う暇人である）、冒識は普通に訊ねた

「高校進学がおじちゃんになった人識君の代わりに、君がとある高校に進学してくれないかな」

「はっ……………？」

これが

《荒唐無稽》に《獄樂領土》ワイルドケースの二つ名を持ち。「なりそこない、出来損ないの零崎」、「零崎一賊の引き籠もり」、「安定する不安定」、「箱の中の殺人鬼」と様々な名で呼ばれるようになる殺人鬼

零崎冒識 十六歳の、冬の終わりにあった出来事である。

不遇愛（後書き）

双識さんって、こんな感じじゃなかった気が……もうちょっと……  
なんか…。

なんででしょうかね？

まあ、言っても多分詮のない話だと思いますし。

愚息蛇足（前書き）

駄文書きで否定人間たる筆者的な立場の光軍による  
しん！

連続こー

どうでもいいですね。

なんだかんだで、よくわからない展開ですねえ。前話も今話も。

では。

## 愚息蛇足

冒識が、零崎一賊の長兄にあたる双識と某ファーストフード店で談話をし、その話の中で（というか、その話の殆どは変態的な変態の内容だったのは伏せておくとして）色々頼まれてから数日後。結局、あ後は何度も断りはしたものの、なんだかんだで双識に丸め込まれた冒識は、その双識から伝えられた場所に向かってみたわけである。

行き先は東京、いわゆる花の東京（花なのは京都の方、だったっけか？）まで新幹線のグリーン車に乗り　アレ？　グリーン車は特急だったっけ　優雅に座りながら目的地まで数時間、なんて生温いもんじゃあない。

貰った青春18きっぷを使い電車で揺られてガンゴトンと数十時間、間で東京まで来た、何故か。

……いや、ていうか、何これ？

つーかさ、青春18きっぷって、せめて新幹線。

というか特急くらい乗せろよ。何ちよつとケチってんだよ……。などという冒識の心情は心穏やかなものではなかったのだがまあ、何はともあれ目的地周辺まで着いたのである。

どうせ急ぐ用事でもないし（もし急ぐ用事だったとしても急ぐ気などさらさらないのだが）適当にそこらを散策してみる、というのがいくぶんか落ち着いた冒識の判断である。

しかし物事というものはその人の考えいた通りに事が運ぶことなど  
まあない。そして例に挙げるまでもなくこの場合も　　つまり、  
冒識は軽い気持ちで考えたのではあるが、その自身の考え通りには  
いかなかったのであった。

そこらを散策のつもりでぶらついていたのだが……いきなり、まさ  
にいきなり目の前に目的地兼そしてかなり巨大なモノ　　建物と  
いふべきか　　を見つけたのであった。  
さつそく、である。

勿論のことながら、冒識の意には反しているのも、言うまでもない。

「ふえ〜、でつかいなー」

だから、そんなもし聞いているものがいたとすれば、その人の気が  
抜けるような声をあげたのだが……そんな馬鹿みたい間抜けたの  
は仕方ない事なのかもしれないし、そしてその発言が淡白なのは仕  
方ない事なのだろう……。

そして、思考。

んで、此処つて何だったつけ？　学園島、とかだったつけ？  
ちゃんとした名前は忘れたから今は曖昧だけど。

結局、あの変態且つ妹マニアな長兄のされるがまま、言われるがま  
ま、なされるがままにされちゃった形にけど……まあ良いか。折  
角の東京だし、初めてなんだもん。軽く楽しむか。

こんだけどでかい建物だし四神ししんいっきょう一鏡いっけいよう辺りとかが絡んでるのかもね。  
えーと、確か関東方面の方に勢力とかがあるのは　　四神一鏡の  
だから……おりがみ檻神おりがみだったつけ？　これも中途半端だけど。

まあ、金とかメチャクチャっつーか、天文学的なくらいあるらしい  
からなー、アイツ等。絶つ対メチャクチャ旨いもん食ってるよ……  
…全く、我々のような貧乏人にとっては本当に羨ましい限りですな、

ホント。

まあ貧乏なのかどうかは、自分だけじゃ判断しにくいところだけど。そついや、前にアス兄の預金通帳偶々ちよつと隠れて見た事あるけど　　ていうか、よく見れたよな。どうやって見たかは忘れたけれども　　零が八つくらい並んでたよなあ……。よしつ。今度また会ったら集ろう、何かおごってもらおう。まあ無理だと思うけど。とここまでを頭の中で思い馳せながらも、冒識はてくてくと移動するのであったのだ。

思い馳(めく)は(せても、一廻らない。

それが、零崎冒識という自己を形成する一つの要因　　というか、自分で決めて自分で守る約束ごとのようなものだ。無論、常人には理解し難い領域の話である。

……まあ、常人でなくとも、理解し難い話なのであるうが。

「さあつて　　メンドーだけど。最低限、双兄に言われたとーりの事くらいでも、こなしますか」

冒識はジャージの上着のチャックを頸元近くまで上げて、肩から提げているテニスラケットを入れるようなバックを担ぎ直し　　門らしき所を潜り抜けた。

「『学園島なる場所に侵入し、とりあえず逃げろ』　　すっげーアバウトだけどそんなくらいの方が俺には丁度いいって話だよな。シンプルイズザベスト！　　まさにこんな感じか？」

にしし、と笑みを浮かべながら兄から言われた事を確認する。

この時点から、約一時間後の時刻。

冒識が侵入してからかなり遅いとは思っのだが、学園島に、侵入者がいるという報告が流れた。

## 愚息蛇足（後書き）

なんでこうなっちゃったんだろう……………。

学園島は学園島です。わかる人には、多分わかるでしょう。

学園的な何かを題材にしたかったのですが……………なにぶん、ライトなノベルなど読まない性分……………は関係ないですけど、読まない人です。

偶々手元にあつた資料的なものが、アレしかなかったとかいう。

めだかボックスでも別によかったんですけどねえ……………スッゲー初期はそれも考えてましたし。

めだかボックスはめだかボックスで、暇さえあれば色々とキャラクターを考えたりしてますから。

では、感想やら何やらお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2433w/>

---

零崎冒識の人間具合

2011年11月18日01時00分発行